

## 階級と民族の《問》——金達寿論——

廣瀬陽一

一 はじめに

金達寿（一九一九〜一九七七年）は、一九一〇年の韓国併合後、日本帝国による土地改革のため急速に没落した朝鮮南部の農家に生まれ育ち、貧窮のため一〇歳のとき日本本土への移住を余儀なくされた、いわゆる在日朝鮮人（在日朝鮮人）一世の作家である。半世紀に及ぶ創作活動の中で、彼は非常に多くの作品を残しているが、そのなかに「朴達の裁判」<sup>(注)</sup>（一九五八年）という小説がある。これは「南部朝鮮K」という町を舞台に、朴達という朝鮮人青年が一人でくりひろげる政治運動をとおして、朝鮮戦争に対する朝鮮人の抵抗を寓意的に描いたものである。

朴達は、両親も出身地もわからないまま、五歳で「南朝鮮きつての大地主、劉家」に仕えてきた無学な作男である。彼は朝鮮戦争の直前に北朝鮮のバルチザンと間違えられて逮捕された際、獄中で政治・思想犯からハンゲル文字をはじめ、朝鮮の歴史や文化などを教わり、朝鮮

の独立と民族解放のために活動するようになった。

だが当時の南朝鮮で共産主義運動をおこなうことが認められてははずはない。したがって彼はすぐに逮捕されてしまう。すると彼は大げさに泣きわめいてすぐに転向を誓い、留置所から解放してもらおう。しかし釈放されるとまたどらまきなどで南朝鮮政府やアメリカ軍を批判しはじめ、つかまるとまたすぐに転向する。こういうことを際限なく何度も繰り返している。このため朴達は獄中の政治・思想犯からは相手にされていないが、町の人々には不思議と人気が高く、同情と共感がいりまじって一種の英雄的存在となっている。のみならず彼を取り締まるべき警察や検察庁のなかにも、彼に好意的な者がでてくる。逆に朴達を転向させなければならぬはずの「M地方検察庁K支庁の治安検事金南徹」のほうが孤立していくのである。

この小説について彼は、「視点について」というエッセ

セイで次のように述べている。自分の創作活動の目的は一貫して、「日本の植民地下にあった朝鮮民族の生活と抵抗とを、全面的にとらえ<sup>(注3)</sup>る」ことであつた。しかし従来の作品ではその試みはうまくいかなかつた。たとえば『玄海灘』では「西敬泰」と「自省五」という二人の人物の視点を設定して、これを交互にさしだし、つみ上げていく手法をとつた。しかしそれでは、「私・作者はこの二人の生活の範囲から外へはでることができなかつた<sup>(注4)</sup>」。そうなつてしまふ根本的な問題はどこにあつたのか。それは「視点」が「文体」の問題であることに気づかなかつたところにある。そこで自然主義的な文体を放棄して「説話体の文体」で書いてみた。それが「朴達の裁判」だといふのだ。

ここから明らかになることの一つは、金達寿が転向を、いわゆる「転向文学」の作家とは違つて、転向者の内面を描くことに関心を持つていたのではないといふことである。しかしそれと同じくらい重要なことは、金達寿が朴達の転向を、日本の植民地下で虚げられてきた朝鮮民族ならではの抵抗の表現として描いているわけでもないといふことだ。たとえば中島誠は「いまの韓国（この文章が書かれたのは一九七五年である）の実状をひそかに見ていると、無数の朴達がいることがわかる」と語つ

ているが、これは非常に疑わしい。それは日本人の多くは国家権力によつて転向を強制させられただけで、本心から転向を望んだ者はいない、だから転向制度がなくなれば彼らはまた国家権力との闘争をはじめに違いないと考えるのと同じくらい、希望的観測にすぎない。実際、転向者の大部分は、転向にあつたつてたいした精神的苦痛もなかつたし、第二次世界大戦が終わつて社会状況が変わつても国家権力との闘争を再開することもなかつた。そもそも自分の意識的あるいは無意識的な態度変更を転向と認識し、自己吟味すること自体が非常に困難なのである。そのことはたとえば、吉本隆明の「転向論」(一九五八年)と、「わが転向」(一九九一年)とを比較すれば一目瞭然<sup>(注5)</sup>だ。

こうして「朴達の裁判」は、ブルジョアとプロレタリアートとの階級闘争を描いたものではないが、日本人(帝国主義者Ⅱ加害者Ⅱ悪)にたいする朝鮮人(植民地の人々Ⅱ被害者Ⅱ善)の民族闘争を描いたものでもない。この小説の重要性は、そうした二項対立的な構造を成立させている基盤を否応なしに暴露してしまうところにある。このことをさらに考察するために、ここでいったん「朴達の裁判」から離れ、「日本の冬」(一九五六年)といふ小説を取りあげたい。

## 二 戦後日本の共産主義運動と民族問題

「日本の冬」は、いわゆる「日本共産党（以下「党」と表記）の五〇年問題」を題材として、戦後日本の共産主義運動を批判的にえがきだした長編小説である。ここで「五〇年問題」というのは、コミンフォルムの機関誌の一九五〇年一月号に匿名で発表された党批判の論文を契機としておこった、党全体の大混乱をさしている。

物語は、五〇年問題のなかで党を除名された在日朝鮮人の辛三植と、法務省特審局の辻井次夫（彼は実は党の地区委員でもあり、そこでは辛三植の上役でもある）の指令で辛三植を調査する八巻啓介を中心に展開していく。辛三植は第二次世界大戦が終わった直後から在日朝鮮人連盟（朝連）で幹部として活動していた。しかし一九四九年に朝連が強制解散を受けると、すぐに入党した。今日の眼からみれば意外だが、当時の党は在日朝鮮人の入党を積極的に歓迎していたのである。だが一九五〇年夏に朝鮮戦争が勃発した際、党の方針に反してアメリカ軍の南朝鮮からの撤退を求めるピラを配ったため、「悪質分派」とみなされて謹慎処分をいわたされてしまった。さらに謹慎中に彼を訪ねてきたある在日朝鮮人党员に、「ぼくたちはこれからは、少し自分の頭で考えなくてはならないと思うんだ」と語ったこと（注10）から、

ある会議に出席した際、席上で突然「スパイ」として吊し上げられたあげく、一方的に除名されてしまう。

党は辛三植に自己批判をすれば復党を認めるといい、他の党员もそれを勧めるが、彼はなにを自己批判すればよいかわからず、また「スパイ」として除名した者を簡単に復党させようという党の姿勢にも疑問を感じたことから、態度を保留したまま肩書きのない一党员として再出発することを願うが、拒絶されてしまう。

除名された辛三植は翌月になって、彼と同様、党から分派として除名された在日朝鮮人の会合に参加するようになり、彼らとともに朝連にかわる在日朝鮮人団体を設立すべく活動するようになった。こうして一年を過ごした彼は、ある日の会合で、広島で在日朝鮮人団体の主催の朝鮮戦争一周年を記念する行事がひらかれること、その大会に辛三植たちの組織からも参加者をだすよう要請を受けたことを聞き、その代表に指名される。辛三植は「ここではどんなあたらしい党風、作風が生れているの（注11）であろう」と考えて期待を胸に参加するのだが、実際に参加してみると大会の盛況と裏腹に、大きな失望を感じずにはいられない。それは党の指導部と同様、彼らもまた「党内闘争ということ（注12）を、指導権の闘争としかみていない」ことがわかったからだ。

失意のまま東京に戻った辛三植は、その後も復党を求めてあちこちの党員を訪ね歩くが、まず自己批判すべきだといわれるばかりで進展せず、また「朝鮮人のあいだではちよつと影響力のある」辛三植を力で屈服させようとする辻井の策略もあって、在日朝鮮人社会からも孤立することになってしまふ。

辛三植はこれらの体験をつうじて、一九五〇年代初頭の大混乱が、党を侵略者としてえがきだすことで、「サンフランシスコ講和条約、日米安全保障条約、日米行政協定等を」「意のままに生みだ」そうとした「敵」の策略にのせられてしまった結果生じたものだと感じつつも、そのような混乱を生みだしてしまった党の体質の根底にあるのは、「組織の問題であるよりは、より、人間の問題であるのかも知れない」と考えるようになる。

まず、朝鮮人についてみれば、三植自身をも含めて、彼らはきのうまで抑圧されていた植民地人であった。その多くは、まだ奴隷根性から抜けきっていない。抜けきっていないことを意識することからは、なおさらのことである。

日本人はどちらかというところを抑圧した側に立っていたが、しかし彼らの多くも、朝鮮人にな

するおなじその抑圧者から、抑圧されていたのであった。しかも彼らは、きのうまでは共産主義などとはまったく反対のもの、軍国主義・ファシズムを謳歌していたのである。

奴隷根性とファシズムの謳歌、それはおなじ根からのものだ。それによるゆがみを、否定することはできない。

〔……〕

奴隷根性とはまっすぐそのままなる事大主義、ファシズムを謳歌した精神そのままの権威主義、助平根性、神秘主義、野郎自大、官僚主義等々、それらは党がふくれ上るといっしよに、そのままふくれ上っていたのだ。その党が一つの小さな試煉、国際批判にあうことによつてがたがたと崩れた。それがこんどの分裂であつた。<sup>(注13)</sup>

戦後日本の共産主義運動において、階級闘争の名のもとに、在日朝鮮人による民族自決権という問題は完全に無視されてきた。これは党が在日朝鮮人を「日本の中の少数民族」とみなし、党の方針に無条件に従属すべき存在として利用したことによる。<sup>(注14)</sup>

その最初となつたのは、党中央委員会の幹部だつ

た金斗鎔の論文「日本における朝鮮人問題」(『前衛』一九四六年二月)である。それは、在日朝鮮人は日本の

人民解放闘争に参加し、天皇制を打倒することによってはじめて解放が得られると力説したものだ。また同年八月の第四回党拡大中央委員会では朝鮮人問題が討議され、在日朝鮮人団体の参加者に、入党して党の指導のもとで日本人と共闘するよう呼びかけた、いわゆる「八月方針」が決定されている。これは「五〇年問題」のなかで混乱した中でも継続され、一九五一年二月末に非法に開催された第四回全国協議会では、在日朝鮮人は「在日少数民族」と規定され、彼ら「在日少数民族」は「アジアをアジアの手に」取り戻すために日本の人民大衆と連携することこそが「わが民族の解放を要求する「愛国者」としての光榮ある任務である」とされている。しかしいうまでもなく、ここでいう「わが民族」は日本人であるから、この方針が意味しているのは在日朝鮮人の民族的否定と一方的な日本人への奉仕と犠牲である。にもかかわらず民戦(一九四九年に強制的に解散させられた朝連の後継団体として結成された在日朝鮮人団体「在日朝鮮統一民主戦線」のこと)はこの方針を採択し、在日朝鮮人の党員や支持者を様々な暴動や行事に送りこんだ。そしてそれは一九五五年に、在日朝鮮人総連合会(朝

鮮総連)が結成され、在日朝鮮人がいつせいに党から離脱するまで続いた。

いうまでもなく、共産主義運動の大義のもとで少数民族の民族自決権が抹殺されたことは、日本に特有の現象ではない。カルパナ・サーヘニーが『ロシアのオリエンタリズム』で暴いているように、そもそも共産主義国の総本山であるソ連が、露骨なまでにそのような政策を実行していたのである。<sup>(注)</sup>たとえばレーニンは一九二一年に、一〇月革命四周年を記念して、「われわれは、すべての非ロシア民族に、彼ら自身の共和国または自治州をあたえた」と誇らしげに演説している。しかしこの時期、実際に自治らしきものが認められた民族集団は、ソ連国内の二〇〇もの民族集団のうち、わずか二つの民族にすぎなかった。しかもなぜある民族集団に自治権が与えられ、別の民族集団には与えられなかったのかという基準は公開されなかった。ポリシエビキ政府による民族政策は、諸民族の平等をめざすどころか、ただ政府の権限強化を目的としたものにすぎなかったのである。そのため党指導者の恣意的な意思一つで、何の前触れもなく移住を強制されたり自治権を一方的に剥奪されたりした。

さらにレーニンは、その結果に諸民族が異議申し立てをおこなわないよう、徹底的に弾圧するよう主導した。

たとえば一九二二年に、穀物や家畜の没収によって引きおこされた飢饉が地方で猛威をふるったとき、聖職者たちは飢えた者たちへの寄金をおこなうため、救済委員会を設立した。これに対してレーニンは、このような「絶望的飢餓」の今こそ、教会に壊滅的打撃を与えるチャンスだと考えた。というのも住民がそれを積極的に支持しないにしても、飢餓は少なくとも「これら大衆を中立化する」だろうと考えたからだ。「この問題について反動的な聖職者と反動的なブルジョアの銃殺者数は、多ければ多いほどよい。今こそ、この大衆が数十年にわたり、いかなる抵抗でさえあえて企てようとはしないような教訓を教え込むべきである」。

ではなぜマルクス主義者は民族問題を重視しなかったのか。この点についてエンツォ・トラヴェルソは『マルクス主義者とユダヤ人問題』において、マルクスの「ユダヤ人問題について」（一八四三年）からアブラム・レオンの『ユダヤ問題の唯物論的解釈』（一九四三年）までの間になされた、ユダヤ人問題に関するマルクス主義者の言説を吟味して、それらがユダヤ人をいかに「市民社会」へ同化させるかという議論に終始したかを指摘している。彼によれば、マルクス主義者は民族が国家や資本主義とは異なる固有の次元にある問題だということをも

まったく理解していなかった。彼はいう、「マルクス主義者は民族的現象の客観的定義づけに悩まされていた。彼らは民族の構成要素を経済・言語、領土などにおいて捉え、しばしば民族の主体的次元を考慮するのを忘れていた。つまり、集団の運命によって結びついた、文化的共同体を形成する集団の意識を、である」と。その根底にあったのは、民族問題は資本主義が発展するにともなって消滅するだろうというものだった。

ここからみれば、辛三植が復党のための自己批判に納得のいく理由を見つけられなかったのは当然である。彼以外の黨員にとつては、あらゆる暴力的言動で彼を屈服させることが目的だったのであり、理性的な議論など最初から選択肢になかったのだから。とはいえ、「五〇年問題」をへて辛三植が、マルクス主義から民族主義へと態度変更したかのように考えるのは適切ではない。たとえば尹健次は『異質との共存』（一九八七年）のなかで、鶴見俊輔の言葉を援用して、「日本近代史の最も暗い部分朝鮮と（在日）朝鮮人に見出され、日本人の思想・精神の最も醜い部分がそこに端的にあらわれている」。「そのことは、朝鮮や朝鮮人につらなる多くの被差別・被抑圧の集団が存在することを否定するのではなく、むしろ、朝鮮や朝鮮人にそれら被差別・被抑圧の集約的表

現を託していると理解してよい」と述べている。<sup>(注1)</sup>つまり現代日本に残存しているさまざまなマイノリティ差別の中で、もつとも劣悪なのが在日朝鮮人差別だといふのである。しかしこの種の主張は読者にある誤解を与える。それは日本人には在日朝鮮人が受けるような社会的抑圧が何もないかのような誤解である。実際、ここから在日朝鮮人が日常的に受けている精神的・物質的苦痛は、日本人には決して理解できないという主張までは、ほんの一步の距離である。

いうまでもなく、辛三植が「五〇年問題」の体験から得た認識はそういうものではない。辛によれば「朝鮮人の奴隷根性」と「日本人のファシズムの謳歌」は異質なものではない。それらは表面的には違っても、ともに朝鮮人と日本人とを抑圧するものから抑圧されていることの表現形態なのである。この意味で日本人と朝鮮人とは、対立関係にあるのではない。したがって、在日朝鮮人差別の問題は階級闘争によつては解決できないから民族闘争へと路線転換せねばならないというような考え方は、辛からみれば間違っている。なぜならそのように考えること自体もまた、朝鮮人と日本人とをともに抑圧するものから抑圧されていることがもたらしたものだからである。であるならばどのような立場に立つべきなのか。階

級か民族か、日本人か朝鮮人かといった二項対立的な構造を客観的にみるような場所ではなく、そのような《客観性》そのものがローカルな共同主観性にすぎないことをみる場所に身を置くほかない。この世界認識を獲得したことが、金達寿の存在を特異なものにしている。

### 三 金南徹の転向と朴達の「転向」

「五〇年問題」の渦中にあつたとき、金達寿にとって問題だつたのは、戦後日本の共産主義運動が、階級闘争の名のもとに民族闘争を抑圧してることだつた。けれども「朝鮮人の奴隷根性」と「日本人のファシズムの謳歌」のあいだに本質的な違いはないことに気づいたあとでは、彼にとって「闘争」の意味が根本的に変わつてくる。金達寿はもはや、特定の階級や民族のために著述活動をおこない、政治運動をするのではない。「朴達の裁判」にはそれが、金南徹との対決という形で表現されている。

「おれのおこるのはな」ことばつきまでが変つてきた。「まえからいつも再三いつているように、おれは法によつておこっているんだ。きさまはその法律に違反しているのだ。しかも、一度や二度ではない。

きさまには、それがどうしてもわからないのか！」

「旦那、それはムリというもんでやすよ。あつしのよなムチムシキ（無知無識）者に、そんな法とか法律といわれやしても、どつちがどつちだかわかりやしねえですよ。あつしらにわかるのは、旦那たちがおこるかおこらねえかでやすよ。それだけでやすよ、旦那」

〔……〕

「朴達、それならいづがな。おれはいつも、きさまにおこっているじゃないか。おれはきさまに、いっぺんだっておこらなかつたときがあつたか？ つままり、法はいつもきさまに向つておこっているんだ。それできさまはまたいつも、これからはもう決していたしやせん、きつと真人間になります、どうか今回だけは——、と何百べんもおじぎをしていっただうら」

金はもう疲れきっているらしく、いつの間にか、その口調は珍しく説得的な口調になっていた。彼としてはおそらく、こういう説得的な調子は、自分の妻にたいしてもあまりもちいたことはなかつたであらう。

考えてみれば、こういう取調べというものはそう

いう調子こそが本来のスジなのかも知れないが、しかし、金南徹のばあいは、この何がなんだかわからない男を、もうほとほとあましたというかつこうであつた。それはこんどに限らず、彼は朴達を取調べていて、さいごにはきまつたように、自分はいつたい何をこうムキになつて怒っているのかわからなくなつた。

朴達の犯罪事實は、もはや明りようである。それを彼は否認しているわけでもなければ、かくしているわけでもない。別に、これという背後関係があるとも思われない。つまり、底は浅いのだ。だいたいこんな奴に、こんな奴が、——と金は彼にて、<sup>(金達)</sup>を、はの全部をくつつけて思つてゐる。

ここで金達寿は、「自主的な人間」ではないから、朴達の「底が深い」ことがわからないのだと説明している。<sup>(金達)</sup>しかしそれは金南徹という作中人物が「自主的な人間」でないといっているわけではない。たとえば金達寿は「朴達の裁判」の著作を鶴見に送付して、「あなたに読んでもらわないと困るんですよ」と語つたとい<sup>(金達)</sup>う。これは鶴見を主筆とする『共同研究転向』のメンバーもまた、金達寿からみれば「自主的な人間」でないとい

うことを意味している。

『共同研究転向』のなかで転向は、国家権力を頂点とする「権力によって強制されたためにおこる思想の変化」と定義されている。<sup>(注2)</sup>つまり、ある知識人は権力から支配を受けたとき、それと闘うにせよ、そこから逃れるにせよ、さまざまな決断のパターンを自由に選択しうるが、そのなかで権力への追順を選択したのが転向者だということである。鶴見は転向をこのように再定義することで、戦前の共産黨員やそのシンパに特有の現象とされてきたこの問題を、万人に開かれたものにしようとした。しかし実際にはそれは、従来の枠組みを少しも超えるものではなかった。そうなってしまった原因は、研究会のメンバーが誰も、「転向者」がどのような人間であるかを問題にしなかったからである。たとえば一九三三年に共同で転向声明を出した、当時の党の最高指導者だった佐野学と鍋山貞親は、自身の態度変更の理由を次のように述べている。

我々は日本共産党がコミンタンの指示に従ひ、外観だけ革命的にして実質上有害な君主制廃止のストローガンをかかげたのは根本的な誤謬であつたことを認める。それは君主を防身の楯とするブルジョア

および地主を喜ばせた代りに、大衆をどしどし党から引離した。日本の皇室の連綿たる歴史的存続は、日本民族の過去における独立不羈の順当的發展——世界に類例少きそれを事物的に表現するものであつて、皇室を民族的統一の中心と感ずる社会的感情が勤労者大衆の胸底にある。我々はこの事実を有りの儘に把握する必要がある。<sup>(注2)</sup>

ここで注意すべきは、「皇室を民族的統一の中心と感ずる社会的感情」をもつた「勤労者大衆」とは誰かということだ。いうまでもなく佐野・鍋山にとってそれは日本人以外ではない。しかし実際にはこの時代、「日本人」のなかには、朝鮮人をはじめとする植民地の人々が含まれていたのである。彼らにとって「皇室」が「民族的統一の中心」であるはずがないのは明らかだ。それは祖国を植民地にした強大な軍隊の別名でしかない。したがって佐野・鍋山の態度変更を「転向の規格」とするならば、彼ら植民地の人々が転向、すなわち「真の日本人」に立ち戻ることはあり得ない。研究会のメンバーに根本的に欠けているのはこのような問いであり、金達寿はそこを衝いたのである。

だが金達寿が徹底しているのは、同じ問いを朝鮮人に

も投げかけたことである。たとえば「日本の冬」と同じく「五〇年問題」をテーマにした高史明の小説『夜がと  
きの歩みを暗くするとき』に、在日朝鮮人の党員である  
金一竜に、同じ在日朝鮮人の党員である白泰植が、日本  
の共産主義運動から離脱して「朝鮮のための真の革命を  
追求する研究会」に参加するよう呼びかける場面がある。  
金一竜は、それは分派活動ではないかと問いかけると、  
白泰植は次のように返答する。

「分派だとか、そうでないとかいう問題じゃないよ。  
そうじゃないか、トンム〔同志〕……」白は眼鏡の  
奥の澄んだ目をきらっと光らせていった。「そうだ  
ろう。おれたちは朝鮮人だ。日本人が自分の祖国を  
第一義的に考えるように、おれたち朝鮮人が、おれ  
たちの祖国の運命を自分の中心に据えて、どうして  
いけないんだ」<sup>(注20)</sup>

これに対して金一竜は、「多くの在日朝鮮人も、日本  
の民族解放民主革命のために闘うことこそが」「朝鮮民  
族の光栄ある統一と独立をかちとり、世界平和に貢献す  
る全民族的課題であることを、身をもってつかみつつあ  
る」という党の文章を白泰植に見せ、「おまえのいって

いることは、このブルジョア民族主義というやつじやな  
いのか」という。それに対して白泰植は反論する。

「わかっているんだ。そして、それでトンムが何を  
いおうとしているのかもね。しかし、おれはこの文  
脈からは、トンムのように考えられないというこ  
とを、いいたいよ。むしろおれは、ここからはかつて、  
われわれを植民地にしていた古い日本人の思いあが  
りを感じるんだ。民族の主体性を認めないところに  
インターナショナルイズムというものが成立しうるだ  
ろうか。これは国際主義を問題にしているが、その  
底にあるのは民族主義、それも古い旧宗主国のもの  
だ。しかも日本の党はそれに気づきさえしていない  
んだ。おれはそのところが怖いね。彼らがほん  
とくに国際主義ということを理解することができると  
どうかは、いまアメリカの占領下にある苦痛を、か  
つては自分たちがその占領者であり、侵略者であつ  
たという事実とかさね合せて、どこまで深く理解で  
きるかにかかっているはずだ」<sup>(注21)</sup>

「五〇年問題」のなかで在日朝鮮人がどのような扱い  
を受けたかを考えれば、このように白泰植がいうのは

もつともである。そして事実、党に所属していた在日朝鮮人は、そう考えて党籍を離脱したのだ。

しかし金達寿の考えは、これとは微妙に違っている。

たしかに彼にとつても、「日本人が自分の祖国を第一義的に考える」ことと、「おれたち朝鮮人が、おれたちの祖国の運命を自分の中心に据え」ることとのあいだに違いはない。事実彼は、朝鮮半島の統一を終生願っていた。だが彼の考えでは、「日本人が自分の祖国を第一義的に考える」ことは、「皇室を民族的統一の中心と感ずる社会的感情が勤労者大衆の胸底」を第一義的に考えるということだ。それならば「おれたち朝鮮人が、おれたちの祖国の運命を自分の中心に据え」ることもまた同じことではないか。それは日本人にとつての「皇室」を、朝鮮人にとつての「祖国」に置き換えただけで、「五〇年問題」で露呈した問題の根本的な解決になっていない。

こうして金達寿は、どのような形であれ、「民族」を実体的なものとして中心化する思考を退ける。「朴達の裁判」において、金南徹は「法」によって朴達に転向を強制しようとする。だが「法」とは階級という概念を捨てて、民族という概念を実体的なものであると認めされる転向制度にほかならない。しかし朴達にとつてそれらはいずれも歴史的に形成された虚構である。だから金南

徹にとつては、この二項対立的な構造のなかで決断することが転向であり、朴達にとつてはこれと闘うことこそが「転向」なのである。

#### 四 おわりに

「朴達の裁判」において朴達は、金南徹との対決をとおして、じよじよに町の人々の信頼を勝ちとつていった。しかし現実的には、金南徹を支えている論理体系と闘おうとするためには、とてつもない勇氣と決断力が必要となる。それがいかなるものであるかを理解するためには、この小説を書いたときの金達寿の立場をみればいい。

金達寿は、第二次世界大戦後に朝連が結成されるとその横須賀支部で活動し、朝連が強制解散されると入党した。しかし彼は「五〇年問題」の際には「悪質な分派」として除名されてしまった。また朝連の後継団体である朝鮮総連も、一九五八年に彼が出版した『朝鮮——民族・歴史・文化』（岩波新書）を、朝鮮人民の主体性が欠如しているという理由で激しく非難した。そしてこれを契機とする朝鮮総連の個人攻撃は一九八〇年ごろまでつづいた。さらに一九四七年に設立された在日大韓民国居留民団（民団）は、設立当初から彼を北朝鮮政府のスパイとして攻撃していた。そして反共政策を掲げる韓国

政府は彼を極左系人物であるとみなし、著作を「不穩文書」に指定した（著作の発行が解禁されたのは一九八八年である）。このため彼は一九八一年まで韓国の生まれ故郷を訪問することができなかった。こうして金達寿は、一九五〇年代の終わりには、日本はもちろん、在日朝鮮人が安心して拠り所にできるはずのあらゆる国家や団体から敵視される存在になった。<sup>(注2)</sup>

《客観性》そのものがローカルな共同主観性にすぎないことをみる場所に身を置くことは、現実的にはこのような困難と闘うことである。しかしこの場所に立つことをおそれないものだけが、真にものごとを根底的に<sup>ラディカル</sup>考えることができるのだ。

## 注

(1) 現在では在日朝鮮人は「在日韓国朝鮮人」あるいは「在日コリアン」と表記されるのが一般的である。しかし金達寿はそれらの言葉がなかった時代から日本で活動していたため、ここでは混乱を避けるために、表記を「在日朝鮮人」で統一したことをお断りしておく。「朝鮮人」という表記についても同様である。

(2) 「朴達の裁判」(『新日本文学』一九五八年一月号)。

本論での引用は『朴達の裁判』(一九五九年五月、筑摩

書房)からおこなった。

(3) 「視点について」(『金達寿評論集上 わが文学』一九七六年二月、筑摩書房、所収)二〇七ページ。

(4) 同前、二〇九ページ。

(5) 中島誠「現代における転向論の意義」(『転向論序説』一九八〇年五月、ミネルヴァ書房、所収)二五四ページ。

(6) 内は論者の補足である。

(7) 吉本隆明は「転向論」で、日本のインテリゲンチヤがたどった典型的な転向の過程の一つに「思考自体が、けつして、社会の現実構造と対応させられずに、論理自体のオートマチスムスによって自己完結する」ことを挙げている(『吉本隆明全著作集13』一九六九年七月、勁草書房、所収、一九ページ)。これは現実がどのようなものであると、自分が原則を固執しておけば、それで現実にたいする抵抗になるという思考の在り方である。彼はその典型として小林多喜二や宮本顕治を挙げているが、当然ここには、戦争に協力しながら戦後になって、あれは実は抵抗だったといいつくろつた詩人たちも含まれている。しかし吉本は「わが転向」では、彼が書いたものに影響されて左翼運動をおこなない、その後自殺してしまった学生たちにたいして、「これまで、責任がないわけではない、と思つてきまし

たが、時代が変わったんだから罪責感もこれきりにさせてもらおう」(『わが「転向」』一九九五年二月、文藝春秋、所収、二二ページ)と態度変更している。この態度変更が、彼が「転向論」で批判した詩人たちと同じものであることは明らかである。

- (7) 「日本の冬」(『アカハタ』一九五六年八月一日〜二月三十一日まで連載)。本論での引用は『日本の冬』(一九五七年四月、筑摩書房)からおこなった。

- (8) 日本共産党の五〇年問題については、小山弘健『戦後日本共産党史』(一九六六年一月、芳賀書店)を参照。
- (9) 在日朝鮮人と戦後の党との関係については、朴慶植『解放後 在日朝鮮人運動史』(一九八九年三月、三二書房)を参照。

- (10) 『日本の冬』、前掲書、九七ページ。

- (11) 同前、一八九ページ。

- (12) 同前、一八九ページ。

- (13) 『日本の冬』、前掲書、二一九〜二二〇ページ。

- (14) 以下の段落については朴慶植、前掲書を参照。なお本論で言及した在日朝鮮人関係の論文はすべて、朴慶植編『朝鮮問題資料叢書15 日本共産党と朝鮮問題』(一九九二年五月、三二書房)に収録されている。

- (15) カルパナ・サーヘニー(袴田茂樹監修・松井秀和訳)『ロ

シアのオリエンタリズム——民族迫害の思想と歴史』(二〇〇〇年一月、柏書房)一四二、一六九ページ。なお本文で引用したレーニンの発言のうち、前者は「十月革命四周年によせて」という題で日本語版『レーニン全集33』(一九五九年七月、大月書店)にも収録されているが、後者は一九九〇年まで公刊されなかった。この書簡が公開されたことで、ボルシェヴィキ政府の民族政策の矛盾、つまり「ある原則を公表しながら、実際にはそれと反対のを行う政策」(一六九ページ)がスターリンによってではなく、レーニンによって始められたことが明らかになった。

- (16) エンツォ・トラヴェルソ(宇京頼三訳)『マルクス主義者とユダヤ人問題——ある論争の歴史(1843-1963年)』(二〇〇〇年六月、人文書院)三〇一ページ。

- (17) 尹健次「異質との共存——民族的自覚へのひとつの回路」(『異質との共存——戦後日本の教育・思想・民族論』(一九八七年三月、岩波書店、所収)四ページ。

- (18) 『朴達の裁判』、前掲書、七四〜七六ページ。

- (19) 同前、七六ページ。

- (20) 鶴見俊輔「国民というかたまりに埋めこまれて」(鶴見俊輔・鈴木正・いいたも『転向再論』二〇〇一年四月、平凡社、所収)二二二ページ。

- (21) 思想の科学研究会編『共同研究転向 上巻』(一九五九年一月、平凡社) 五〇六ページ。
- (22) 佐野学・鍋山貞親「共同被告同士に告ぐる書」(『文藝春秋』一九三三年七月号) 一九五〇―一九六六ページ。引用に際し、旧字体は新字体に改めた。
- (23) 高史明「夜がときの歩みを暗くするとき」(一九七一年九月、筑摩書房) 一三八ページ。( ) 内は論者の補足である。
- (24) 同前、一三八―一三九ページ。
- (25) 崔孝先『海峡に立つ人——金達寿の文学と生涯』(一九九八年十二月、批評社) 一一二―一二三ページを参照。

(ひろせ・よういち)